26H-pm02

シスプラチンによる外来化学療法の実態調査と薬剤師の役割

○櫻井　洋臣[1], 小野田　佳代[1], 市田　泰彦[1], 加藤　裕芳[1], 遠藤　一司[1]（[1]国立がんセンター東病院薬）

【目的】シスプラチン（CDDP）は、様々ながん腫の化学療法における key drug であり、その投与は短期間の入院による治療が一般的となっている。近年、G-CSF 製剤や制吐剤等の支持療法の向上や患者の QOL 向上の観点から、がん化学療法は入院から外来へと移行しており、CDDP も例外ではない。既に低用量の CDDP 投与に関しては、様々な施設において実施されているが、高用量の投与に関しては報告が少ない。今回、我々は高用量の CDDP による外来化学療法の実態を調査するとともに、外来投与における薬剤師の関わり方について検討した。

【方法】2006 年 5 月 1 日から 2007 年 11 月 30 日までに、当院の通院治療センターにおいて外来化学療法を受けた全患者を対象に、CDDP が 60 mg/m^2/day 以上投与された患者を高用量の CDDP 投与と定義し、実態調査を行った。該当した患者に関しては、診療録より治療レジメン、支持療法の状況、薬剤師による薬剤指導や治療後の経過等について調査し、更なる検討を行った。

【結果および考察】調査期間における約 15000 件の外来化学療法の実施中、高用量の CDDP 投与は 16 名の患者で計 44 件が実施されていた。治療レジメンは、膀胱がん及び腎盂尿管がん領域における GC 療法（ゲムシタビン+シスプラチン）が最も多かった。治療期間中に患者からは悪心、食欲不振、吃逆、倦怠感や便通の異常など様々な訴えが認められた。一方で、薬剤師による薬剤指導は、基本的に外来治療の初回及び 2 回目を対象としているため、患者個々のニーズを汲み取った薬剤指導という点においては改善を加える必要性が示唆された。今後は、これらの結果を薬剤部業務に反映していくことで、患者に対してより質の高いがん化学療法を提供できればと考えている。